



特集

一人でも多くの子供達に「水辺の安全教室」を体験させたい!

～座談会 B&G水辺の安全教室プログラム 改訂を終えて～

出席者

- 椿本 昇三**
筑波大学体育系 教授 (プログラム監修)
- 田村 祐司**
東京海洋大学大学院 准教授 (プログラム監修)
- 川島 正光**
B&G全国指導者会副会長 (プログラム検証)
(久喜市栗橋B&G海洋センター)
- 朝日田 智昭**
B&G財団事業部海洋教育課長(プログラム制作担当)



左から田村准教授、椿本教授、川島副会長、朝日田課長

司会：B&G財団ネットワーク推進部広報課
日時：平成27年2月26日(木) 場所：B&G財団小会議室
※文中敬称略

全国各地で展開していただいている「B&G水辺の安全教室」も今年度で5年が経過しました。この節目を機に担当部署の事業部海洋教育課ではプログラムの改訂に取り組み、このたび専門家の監修を終えて無事に編纂を終了しました。来期からの運用を控え、改訂に尽力した方々から新プログラムの特徴や、今後の展開に寄せる期待などをお話いただきました。

ピラミッドからの脱却

■5年の節目を迎え、昨年の夏から進められたプログラムの改訂が、皆さまのご協力をいただいて今年2月に完成しました。まずは、改訂の目的について制作担当部署から説明してください。

朝日田：水辺の安全教室は年々参加者が増え、昨年には全国の海洋センター・クラブ、学校への出前授業などで6万5,000人以上の人たちに体験していただきました。こうしたなかで、「5年間同じプログラムを使っているの、そろそろ手を加えた内容が欲しい」という声も一昨年ごろからあがっていたため、今回の改訂を決めました。新しいプログラムでは、カリキュラムのバリエーションが増えていることに加え、子供の命を守る視点から学校教育への普及にも力を入れており、経験が浅い指導者や学校の先生方にも積極的に使っていただけるように、動画やイラストを駆使して内容を分かりやすくしています。

■改訂に着手する際、B&G関東ブロック4カ所の地域指導者にヒアリングを行ったのですが、その際、どのような意見が出たのでしょうか。ヒアリングに参加したB&G全国指導者会副会長(埼玉県久喜市)の川島さんにお聞きしたいと思います。

川島：当初のプログラム案は学年別に内容が分かれていましたが、実際には同じ学年の児童でも体格差があり、スイミングスクールに通って水慣れしている子もいれば、顔を水につけられない子もいます。ですから、一概に学年で内容を決めるのではなく、個々に応じてステップアップしていけるような工夫ができないものかという話の流れになりました。ほかにもいろいろな意見が出ましたが、この点が大きな課題として浮かびました。

朝日田：そこで、これまで5年間行ってきた内容をベーシックプログラムとしてまとめ、遊びやゲーム的な要素を取り入れた選択メニューを加えながら、参加者の経験や体格などに

応じて個々がレベルアップできるプログラムの組み立て方を考えていきました。また、ヒアリングの際に、プールだけでなく安全が十分に確保された条件の下であれば、海や川の自然環境の中で体験させることも大切であるという意見も数多く出たので、ページ数としては少ないものの離岸流の対処法や気象に関する学びなどのメニューも整えました。

■こうしてできた素案をもとに、B&G関東ブロックの地域指導者と、実際に子供たちを対象に実地検証をしたのですが、そこでは何か課題が出ましたか。

川島：プログラムを作り始めると、ついついたくさんのメニューを入れたいになってしまうものです。検証でもその点を指摘する声が多かったので、学校の授業という決められた時間内で子供たちのレベルに応じてどんなメニューをどのように組み合わせたらいいのか、実際にプールで子供たちと向き合いながら検討しました。

■ヒアリングや検証を経て、最終的にどのような特徴を持った改訂になりましたか。

朝日田：検証の結果を踏まえたうえで、当初考えた学年に応じてレベルが上がるピラミッド形のプログラム構成を大きく変えました。改訂版でもベーシックプログラムを基準にレベルアップII、IIIの3つの階層を組んでいますが、椿本先生、田村先生の助言をいただきながら、実施する状況に応じて各階層のメニューを自由に組み合わせることができるよう工夫しています。

また、遊びやゲーム、気象や海、川の自然環境を学ぶメニューなどを導入している点も特徴のひとつですが、プロ

グラム自体をダウンロードできるようにしており、動画や画像、イラストを多用しながら内容の可視化に力を入れました。

■改訂の内容について、監修にあたってお二人の第一印象をお聞かせください。

椿本：個々の能力に合わせて柔軟な対応ができる縦断的なプログラム構成になった点が、とても斬新に感じました。また、これまでのプログラムは、どちらかと言えば「水辺の安全教室」という新しい取り組みを紹介する内容でしたが、改訂プログラムはより実践的なハウツーの内容に進化しています。例えば、ペットボトルで体を浮かせることができるという「知識」も、実際にどう使ったら良いかという「知恵」の部分に力を入れています。

平成5年に私たちの筑波大学で「着衣泳」という言葉を作ってから、現代用語辞典に取り上げてもらうなどして徐々に社会のなかで認識されるようになっていきました。今回の改訂でも「水辺の安全教室」に「MIZUBE」というルビをつけさせてもらいましたので、この言葉が世間に定着していったらいいと思います。

田村：競泳については多くの先生が具体的な指導を行っていますが、水に落ちて溺れないためにはどうしたらいいかということに関しては、誰もがなんとなく知っているようで知らないという実態が続いています。そのため、溺れないためのハウツーが具体的にこのプログラムで示されたことの意義は大変大きいと思います。特に、ベーシックプログラムの中身がとても細かく整理されていてわかりやすいので、日本の水泳教育が競泳だけでなく溺水予防にも進んでいきかけになっていったらいいと思います。



関東ブロックの地域指導者の皆さんで行われた実地検証



ペットボトルを使った浮き身の検証



さまざまなプログラムのメニューを実際に試していただきました

期待を寄せるビジュアルの効果

■新しくなったプログラムは、インターネットでダウンロードできる他、動画ファイルも数多く使われています。この発想はどこから生まれたのでしょうか。

川島：これまで、「学校でも『水辺の安全教室』をしたいのですが、どのようにしたら良いのでしょうか」という問い合わせを私たちの海洋センターが受けると、「言葉で説明すると大変なので、一度、実際の教室を見学してください」と答えていました。百聞は一見にしかずと言いますが、背浮きや着衣泳といった馴染みのない動作は視覚的に理解したほうが早いのです。

今回のヒアリングでも、「言葉よりも実際の場面を見せたい」という意見が多く出ましたが、インターネットで誰でも動画を見ることができる時代になっているわけですから、動画ファイルを積極的に使う方向に進んでいきました。

椿本：長く指導を続けているにもかかわらず、着衣泳や背浮きは思った以上に広まっていません。その大きな理由のひとつは、充実した教材がなかったからです。その点、今回の改訂に盛り込まれた数々の動画は「百聞は一見にしかず」の貴重な教材になっており、動画さえあれば雨の日でも教室で見ながらいろいろなメニューの学習が行えます。学校教育への導入を考えた場合、とても頼れるツールになり得ます。

学校の先生はもちろんのこと、家庭や職場でもダウンロードして使うことができます。そのため、親と子が一緒に家で学習するケースも出てくるのではないのでしょうか。

プログラムは打ち出して自分なりに気が付いた点などを加筆することができますから、我が町の海や川といった地域に即したオリジナルバージョンを作って活用することも可能です。

田村：動画だけでなく、写真やイラスト、テキストとのコンビネーションも巧みに組み込まれていると思います。動画でカバーできない部分は文字のテキスト等でフォローされており、しかも各学習内容が系統的にまとめられているので、経験の浅い人でも理解できると思います。

自然体験への道案内

■今回の改訂では、気象や海、川の環境学習にも力が入れています。どのような思いで盛り込まれたのでしょうか。

田村：英国やニュージーランドの子供たちの水泳授業は、もし水に落ちた時に溺れないためにはどうしたらよいかというサバイバル教育に重きがおかれています。そのため、あえて足のつかないプールに入り、犬かき等の自分でできる泳ぎ方で近くの水面に浮かぶ物をつかんで浮いて救助を待つという、我が身を守るプログラムが行われています。

浮くものがない場合は、まずは仰向きで呼吸を確保するために背浮き練習も行われています。背浮き姿勢は、星の形に似ていることから「スターシェイプ」と名付けられ指導されています。

このように、英国やニュージーランドの水泳教育は、競泳から入るのではなく、背が立たない海や川に落ちたときのサバイバル教育から始めているわけです。

椿本：カナダやオランダでも、競泳を学ぶ前に浮いて我が身を守る練習を行います。この際、着ている服や長靴でも浮力体になるといった知恵も授けます。

一方、日本では「泳げる人は命を守れる」という発想のもと、学校教育のなかでは競泳が主体になっていきました。



今年2月に完成した新プログラム。PDF化され、ダウンロードできるようにしています
<http://www.bgf.or.jp/safetyprogram/>

高度経済成長期に全国の小中学校にプールが整備されていきましたが、一度に大勢の児童を泳げるように指導するため、安全面や授業効率を考えると足がつく浅いプールが採用されました。もちろん、それはそれで水泳教育に大きく貢献したのですが、足がつくという前提のもとで多くの児童が泳ぎを覚えていきました。

しかし、水難事故は海や川で起きるので、背が立たないところでどうやって我が身を守るかが重要です。また、溺水事故の8割ぐらいが服を着た状態で起きていますが、上着を着たままクロールで泳いだら力尽きてしまいます。こうしたことから、泳げれば助かるという発想だけに頼るのではなく、背浮きや着衣泳といった安全指導が大切です。

ただし、単に背浮きや着衣泳のやり方を教えるだけでは不十分です。というのも、水に落ちた環境によっては「浮いて待つ」ではなく、少しでも泳いだほうが良い場合もあるからです。ですから、離岸流や気象の知識を取り入れたことで、状況に応じてより大きなリスクは何かを考える幅が広がります。

田村：このプログラムの良いところは、背浮きや着衣泳などの実技だけでなく、気象や海、川の特徴について、知っているようで知らないことが概率的に示されている点です。これらの知識を参考にしながら、地域に合った調べ学習もできると思います。

海洋センターへの期待

椿本：「水辺の安全教室」を学校の授業に導入する際、水泳の時間だけではコマ数が限られていますが、環境学習の要素を含めば総合的な学習の時間などを使って幅の広い学びができるようになります。先ほど言ったように、このプログラムはダウンロードして配布できますから、保護者や地域の人たちも巻き込んで大きな枠組みのなかで展開していく可能性も秘められていると思います。

田村：背浮きや着衣泳といった安全のためのサバイバルスイムは、まだまだ学校の現場や地域社会で十分な支持を得られていません。そのため、今後B&G地域指導者の皆さんが本プログラムを使いながら、地元の学校の先生方や地域住民の皆さんを対象にした伝達講習会を開いていくことも必要になるかと思っています。各学校には体育主任の先生がいますから、教育委員会を通じて研修会に集まっていたり、海洋センターの指導者の皆さんが講師になり、体育主任の先生方に本プログラムを伝えていただくことも大切なことではないかと思っています。そして、全国で水泳授業の中に本プログラムを参考にしながらセルフサバイバルスイムを導入していく学校が、少しずつ増えていく流れができるとうれしいですね。

川島：B&G地域指導者会は全国に400カ所近くありますから、地域ごとにいろいろな工夫をしながら広めていきたいと思っています。私たち指導者が教室対象者に応じた指導アイテムの引き出しをどれだけ持つか、その努力が大切です。「指導者会の皆さん、このプログラムを大いに活用していきましょう!」

朝日田：私たち財団としても、多くの人にこの新しいプログラムを使っていただくために、指導者会の皆さんとしっかりした連携を組んでいきたいと思っています。そして、1人でも多くの子供たちが水辺の安全知識を修得するだけでなく、それをしっかりと身につけたうえで、ぜひ海や川、湖などの自然のなかで思い切り遊んでもらいたいと思います。

■長い時間、いろいろお話いただきありがとうございました。全国の海洋センター、海洋クラブならびに指導者会の皆さまには、ぜひこの新しいプログラムを活用していただきたいと思っています。そしてお二人の先生方には、今後ともさらなるご指導、ご鞭撻をお願いいたします。皆さま、ありがとうございました。



筑波大学 椿本 昇三 体育系 教授
・水泳指導法の開発における第一人者。
・水中安全教育の研究で「着衣泳」という言葉を発案。
・文部科学省 学校体育実技指導資料第4集、「水泳指導の手引(三訂版)」を作成協力。



東京海洋大学大学院 田村 祐司 准教授
・海洋スポーツ健康科学研究室に從事。
・船員教育における海難時のセルフサバイバル理論を研究。
・水辺安全教育プログラム、溺水予防等の教育活動に尽力。
・一般社団法人 水難学会 副会長。



B&G全国指導者会 川島 正光 副会長
・埼玉県久喜市職員。
・(久喜市栗橋B&G海洋センターOB)
・第19期アドバンス/アクア・インストラクター。
・久喜市栗橋B&G地域指導者会 会長。